

作物名：ねぎ

病害虫名：ネギアザミウマ（学名：*Thrips tabaci*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・ 幼虫及び成虫が葉に寄生する。吸汁痕は、かすり状の白斑になる。
- ・ 葉ねぎは葉身部が商品となるため、わずかな食害痕でも商品価値が低下する。
- ・ 幼虫は、雌成虫の体長は 1.1～1.6mm で、高温時は淡黄色～黄褐色、低温時は褐色である。
- ・ 幼虫、成虫ともにアイリス黄斑ウイルス (*Iris yellow spot virus*, IYSV) を獲得媒介するため、食害痕のほかに「えそ条斑病」による被害も発生する。



写真1 食害（吸汁）痕

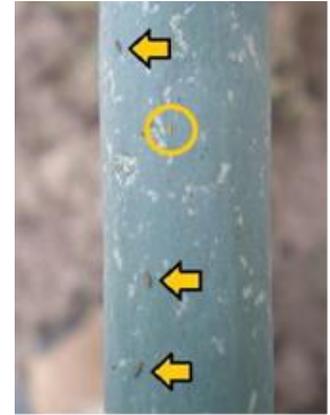


写真2 成虫（矢印）及び

幼虫（円内）

2 伝染源・伝染方法

- ・ 発育期間は 20℃で約 20 日、25℃で約 16 日。成虫の生存期間は約 21～47 日。休眠性はなく、根際部で越冬する。
- ・ 増殖は単為生殖によるものと考えられてきたが、国内で雄成虫を算出する系統も確認されている。
- ・ 在来種で、寄主範囲は、ネギ、タマネギ等のネギ属のほか、キュウリ、トマト、イチゴ、ダイズ、キク、トルコギキョウなど極めて広い。

3 発病しやすい条件

- ・ 高温、乾燥条件が増殖に好適であり、4～6月、9～11月に多発する。

4 防除方法

(1) 耕種的防除

- ・ ほ場周辺の雑草は発生源となるので、管理を徹底する。
- ・ 光反射資材を畝の陽光面を覆うように株元設置することで、ほ場への飛び込みを抑制する。

(2) 化学的防除

- ・ 育苗期後半～定植日の液剤灌注または定植時の粒剤施用により、生育初期の発生を抑制する。
- ・ 多発してからでは防除が困難になるので、生育中は早期防除に心がける。
- ・ 県内において、同一薬剤でも個体群により感受性が異なることが明らかとなっている。薬剤抵抗性の発達防止のため、同一作用機構分類に属する剤の連用を避け、計画的にローテーション散布を行う。

5 出典

(1) 参考文献

- ・ みやぎの野菜指導指針（宮城県）
- ・ 農業総覧 病害虫防除・資材編4（農文協）
- ・ 植物防疫 第67巻第12号:9-13（日本植物防疫協会）
- ・ アザミウマ防除ハンドブック（農文協）

(2) 写真

- ・ 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）